

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 蔡 云逸 |
| 学位の種類 | 博士（造形） |
| 学位記番号 | 博第 40 号 |
| 学位授与日 | 2023 年 9 月 30 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第3条第1項第3号該当 |
| 論文題目 | 不気味なものからの誘い、見えないものを垣間見る —ウィリアム・ブレイクの作品における「闇の肯定」から自作の省察へ— |
| 審査委員 | 主査 武蔵野美術大学 教授 赤塚 祐二 副査 武蔵野美術大学 教授 村上 博哉 副査 武蔵野美術大学 教授 是枝 開 副査 武蔵野美術大学 教授 春原 史寛 |

内 容 の 要 旨

本論文では、美術における闇のなかの不気味なものとは知覚を超越する見えないものを考察してきた。その方法として、3章にわたって、ウィリアム・ブレイクの作品と他の作家たち、さらに自作の分析、比較をもとに、見えないもの、不気味なものを魅力として捉え、美術表現において更なる展開が可能かどうか考察を進めてきた。筆者が論じた闇は、文字通りの闇ではない。その闇は暗闇が起こした恐怖と目眩、それと同時に感じた未知に対する知的な好奇心から始まった。ある夜、知覚の働きが極めて不確実な状況で奇妙な幻視を見た。筆者は覚醒状態と睡眠状態間の記録を通して、不気味な体験に誘惑され、その幻視体験を表現しようとして制作を続けている。このような研究と制作を通して考えた「闇」をまとめると、知的な不確かさのあるもの、日常において抑圧されているもの、無意識に隠していることが夢で再現されたものなどといった内的な闇であることが分かってきた。そしてこの闇には、不安や恐怖、得体の知れないものが多く含まれているという認識が生まれた。

第一章では、闇と闇のなかの不気味なもの、見えないものを考察した。筆者は、ジークムント・フロイトによる「不気味なもの」という論文とそれをコンセプトにしたマイク・ケリーの展覧会「ザ・アンキャニー」を考察した。不気味なもののもっとも顕著なモチーフであるドッペルゲンガー現象とフィクション小説が不気味な効果をもたらすことに必要な条件について、つまり主観的なストーリーの展開でありながら、それが客観性も維持しながら、表現されていることについて論じた。次に、見えないものについて考察を進めた。視覚知覚研究分野の示すところの盲点、変化盲、非注意盲は、すべて見えないことの原因である。アメリカの哲学者であるアルヴァ・ノエの研究によれば、人間にとっ

て、見えないものを見えるものに変えることは、身体の知覚運動技能を使った結果である。さらにブレイクの段階的に認識した知覚モデルを分析すると、ブレイクの二重ビジョンというのは、知覚と想像力を拡大させるように促す知覚モードであると考えを進めることができた。見えないものは知覚運動技能と感覚的な想像力を喚起するものとして捉えられることに考えが至った。

不気味なものと見えないものを比較してみると、マイク・ケリーの「ザ・アンキャニー」展に展示されている慣れ親しんだ人形は、幼い頃の自分自身を人形に投影した記憶を呼び起こし、つい不気味に感じてしまう。また、フロイトは日常生活の中で起こる不気味な出来事について、暗い部屋の中で電気のスイッチを探すことを繰り返すという例えから、不気味なものは、目に見えないものの探求を誘い、想像の中で予感させるものであることが考えられる。フェンスの隙間から猫を見るノエの例や、サセックスの郊外でアザミを口説くブレイクの例から、見えないものは想像力の核心であり、想像力を働かせながら、より本質的な世界の姿を探求していくメディアであると考えられる。

第二章では、不気味さの具体的な表出の例として、幻視画家ウィリアム・ブレイクの作品を紹介し、ダンテの『神曲』のためにブレイクが描いた地獄シリーズから3作品を取り上げ、彼がどのように視覚を使って世界全体を見ていたかを考察した。《森に入るダンテとウェルギリウス》、《欲望の円》と《アンタイオスがダンテとウェルギリウスを降ろす》の3作品の表現方法を研究し、イメージの中にある不気味さや見えないものを表現するための技法を明らかにし、それが絵画の表現にどのように使われているかをまとめた。ブレイクは、異なる角度の強い影と余白を利用してホワイトアウトの効果を生み出した。そのことで、地獄に入る前の劇的な緊張感を演出し、一人称視点からの出来事を描き、加えて視点の多重化で不気味さをもたらしている。比喩を用いて登場人物の精神活動を視覚化することで、絵画の臨場感を高めている。絵画の題材は、登場人物の動きの最中など不安定な状態を選び、物語の主人公の憂鬱で恐ろしい感情を際立たせるものとなっている。多くの出来事を表現するために、パースペクティブな方法に依ることなく、構図は誇張され外側に膨張し、不安定である。興味深い描写で鑑賞者を絵画の中の出来事に引き込み、不穏な予感を与え、見る者の想像力を誘発することを意識している。

第三章では、筆者の作品を振り返って、ブレイクの芸術表現を自分の作品と比較し、見えないもの、不気味なものの美術表現としてさらにどのように展開したかを検証した。筆者は夢日記を使って暗闇の中の世界を簡単なメモのような絵として記録し、時間を置いて改めて自分の夢日記を読み直すことは、自分の予想を超えて想像力を刺激するものであり、それらを対象として見ることは絵画の入り口になるのではないかと考えた。

つまり、絵画の制作では、自分が見た夢を題材に選ぶことで、夢を見て記録したものを第三者の視点から観察するため、絵画の中で二つの視点が混在している。絵画を描くとき、筆者は自分を観察し、同時に観察されるという、ドッペルゲンガー現象に似た現象を自発的に起こしている。筆者は、このような制作方法を進めるなかで、これまで見えなかった多くのものを発見し、不安や疑問を抱えた気分のなかで、想像力をさらに働かせて、作品の中に新たな物語を創造し、見えないものを探求していくようになった。不気味な感情に魅力を感じるのは、そのような感情が非常にリアリティーのある強い感情だからだ。夢は人が忘れがちなものであり、普段は注意を向けないが見

えないもののなかで最も顕著な現象の一つである。そして、夢や日常の些細なことを夢日記のような簡単な絵に描き留めることは、夢そのものを目に見える形で対象化が可能になり、そのことで視野を広くし夢以外の部分も見渡せるようになる。つまり世界をより連続的に見る方法なのではないかと考える。

見えるものには限界があるが、見えないものを垣間見ようとすることは、より連続した世界に近づくこととされており、エネルギーな姿勢だと考える。現代人は科学的な視点に加え、脳と身体の性質によって、既存の世界観で全てのものが見えなくても見えていると思ってしまう。その結果、退屈感、閉塞感に包まれている。本論考の事例のように不気味なもの、見えないものをきっかけに、新しい方法で世界とつながる機会に気づくことは、人間の知覚の可能性を広げ、再び世界を豊かなものとして知覚することができるようになるのではないかと考察した。

本研究を通じて、ウィリアム・ブレイクを中心に研究した結果、筆者も制作について多くの新しい発見をすることができた。これからは、夢を見ている時の視点や制作する時のアプローチを日常生活の観察に応用することで、創作におけるフィクションの境界がより曖昧になって、現実と幻想が混ざり合うことでさらに深い世界が広がっていくことを本論文のさらなる展開として期待している。

21世紀の今、人間の想像力、あるいは人間の妄想がもたらす闇への思索は、最も真摯な知覚の探求であると筆者は考えている。これからも闇のなかの不気味なもの、見えないものを表現することによって、より豊かな、オリジナルな作品を制作できることを期待している。

審査結果の要旨

1. 論文の概要

本論文は、申請者の幼少期の経験、すなわち暗闇の中にいるときに恐怖だけでなく高揚感もたらされていたという経験と、さらに申請者自身が見た奇妙な幻視をきっかけにそれを制作に結びつけてきたことが論考の原点になっている。暗闇に恐怖を感じるだけに止まらないこうした闇への興味と取り組みは、多くの表現物として登場してきているが、本論文でもその謎を解明しその本質に迫りたいとする申請者の強い好奇心が推進力となり独自の知見を得ることができた。予備論文において、フロイトの1919年発表の論文「不気味なもの」を先行研究として取り上げ、不気味さの仕組みの解明を進め、この論文をコンセプトにしたマイク・ケリーの展覧会「アンキャニー」の分析を経て不気味なものの本質に迫っていく。一方で、申請者自身が学部時代に出会ってその絵画の持つ不気味な存在感に引き込まれ、魅了されてしまった、イギリスの幻想画家であるウィリアム・ブレイクの作品を主な研究対象として、絵画制作上における不気味さや見えないものの表現とその効果を分析し、論考を重ねた。

申請者はその考察のなかで、ブレイクが闇を人間にとってポジティブな影響力としてとらえ、その絵画や文学作品の闇の表現が、同時代の作家の作品とは大きく異なっている点に注目し今日でも有効な視点となり得ることを示唆している。

さらに本論文では闇の中の「見えないもの」についてアメリカの哲学者アルヴァ・ノエの論文「視覚世界は大いなるイリュージョンか」から、人間が視覚体験上非常に多くの判断ミスを犯してしまうことを指摘している研究者ら提唱する変化盲、非注意盲、盲点のことについて言及されていることを取り上げている。人間がある条件下で起こしてしまいがちな視覚的な盲点を確認して人間の身体のメカニズムから起こってしまう「見えないこと」の論考を深めている。

2. 論文の内容と構成

論文の構成は以下のとおりである。

目次

はじめに

第一章 闇 (darkness) における考察

1. 闇を考察する

1-1. 闇のなかの「不気味なもの」

1-2. 闇のなかの「見えないもの」

2. 「不気味なもの」と「見えないもの」

第二章 ブレイク作「神曲」の挿絵（地獄篇）の不気味さの表現

1. ウィリアム・ブレイクとダンテの神曲

2. 地獄の暗い森の中へ——作品《森に入るダンテとウェルギリウス》を考察

2-1. 《森に入るダンテとウェルギリウス》紹介

2-2. ダンテの不気味な暗い森とそこにある見えないもの

2-3. セザンヌの《フォンテーヌブローの城》と比較する

2-4. 長谷川等伯の《竹鶴図屏風》と比較する

2-5. 《森に入るダンテとウェルギリウス》の表現手法とその効果

3. 作品《欲望の円：フランチェスカ・ダ・リミニ》を考察する

3-1. 作品《欲望の円》を紹介する

3-2. 一人称からもたらす不気味さと一人称の多重化の効果

3-3. 《欲望の円》の中の中心人物のドッペルゲンガー

3-4. 登場人物の心理を視覚化することによる不気味さの表現

3-5. 外側に広がる構図がもたらす不気味さ

3-6. 《欲望の円》に関連するブレイクの視覚的考察、《欲望の円》の表現とその効果をまとめる

4. 限界まで追い詰められた予感の不気味さ

4-1. 不安定の事象がもたらす想像力——《アンタイオスがダンテとウェルギリウスを降ろす》を考察する

4-2. 7世紀の聖書の写本挿絵《大洪水》と比較する

4-3. 《アンタイオスがダンテとウェルギリウスを降ろす》の表現とその効果をまとめる

第三章 自作について考察する

1. 見えないものの種—— 夢日記

1-1. 虚体としての夢日記

1-2. 夢日記の表現

2. 不気味な夢を記録する

2-1. 《Dream of hometown and 3 sankes》を紹介する

2-2. 夢日記を油絵作品に展開する——《レッドドラゴンの夢》を紹介する

2-2-1. 夢日記から作品に転換する時の三段階のイメージ変化

2-2-2. 夢の中の思考と表現形式

2-3. 作品《The Vision into home》の紹介と制作意図

2-3-1. 作品《The Vision into home》とブレイクの芸術表現との関連性

2-4. 数個の夢を一つの作品にする——作品《The Vision of Nowhere》を考察する

2-4-1. 作品《The Vision of Nowhere》の表現方法

3. 展示方法がもたらす効果を考察する

4. 自作考察のまとめ

結論

参考文献

図版出展一覧

本論は3章から構成され、いずれも予備論文での指摘や修正点を加え、論考として深まった内容となっている。第一章は「闇(darkness)における考察」とした。闇は美術表現でも多く取り上げられているが、陰影の表現としての闇ではなく、闇が我々に心理的にもたらす「不気味なもの」をフロイトの精神分析の理論によって考察し、さらに闇のなかの「見えないもの」を、ブレイクの表現の中の知覚モードを分析することで理解していく。続く第二章では、本格的にブレイクの作品(ダンテの「神曲」の挿絵《地獄篇》の中の《森に入るダンテとウェルギリウス》)を分析、不気味さの表現について論考を進めていながら、セザンヌの《フォンテーヌブローの城》や長谷川等伯の《竹鶴図屏風》比較と分析を試み、絵画表現上の闇と余白のつながりを解明している。さらに《欲望の円：フランチェスカ・ダ・リミニ》の中の人物の表現において、大きな時間差がありながら同一画面上に登場させることで起こるドッペルゲンガー効果による不気味さのあり方を、ギュスターヴ・ドレの《欲望》と比較を通して検証している。さらに限界まで追い詰められた時に感じる予感の不気味さとして、《アンタイオスがダンテとウェルギリウスを降ろす》の表現とその効果を、7世紀の写本挿絵《大洪水》と比較検証した。第三章では、ブレイクの作品と申請者自身の体験と夢日記として進めた作品を比較し、自作の絵画作品《The Vision of Nowhere》とブレイクの芸術表現との関連性を見出した。このことは今後の申請者の作品展開に大きな影響を与える成果と言えるのではないだろうか。我々が表現することにおいて、闇がもたらす「不気味なもの」や「見えないもの」への興味や探求は、人間の想像力あるいは人間の妄想がもたらす闇へ思索として最も真摯な知

覚の探求で、その興味の深め方の工夫によってまだまだ新しい視野が開かれると結んでいる。

3. 作品について

申請者の実体験に基づく微かな違和感から発した絵画作品は陰影に富んでいて非常に魅力的であり冒険的だ。論文執筆の目的を自作の表現世界の広がりと向上に資する論文として設定したことも多くの知見が得られ、論文との一体感があり結果的に意義深いものとなった。公聴会を開いた展示会場 FAL には 4メートルを超える作品を含む大小十数点の油絵とスケッチブック大のサイアノタイプによる作品群が展示台の上に設置された。申請者の油絵の方法は極めてオーソドックスなものでありながら色調やタッチ、空間構築性、身体表現のあり方など高いレベルの集合体であると言える。作品には申請者の夢を土台にした独特のニュアンスを持った表現力があり物語性を強く感じさせる。

しかし申請者の興味はその物語の説明に終始しているわけではなくむしろ鑑賞者に対してはいくつかの事案を投げかけてはいるものの、そっけない態度をとっていて、鑑賞者は何か理由のある空間を魅力的だが微かなヒントをつなぎ合わせようとして繋がらないまま独特の筆触や複雑で艶かしい色合いに見入っていると言える。サイアノタイプによる作品は夢の記録として使われるドローイングのようなものだが、多くの技術的な制約が逆に夢というなかなか捉えどころのない空間のあり方を饒舌になりすぎず適度の曖昧さを武器にして作品として定着させることができた。夢日記の記録媒体として有効であると思う。私は暗闇が人間に与える表現力の可能性について新たな申請者独自の表現性を導き出したのではないかと高く評価している。

3. 審査の経緯と結果

2023年8月17日午後2時よりFAL(2号館1F)にて、蔡云逸の博士論文『不気味なものからの誘い、見えないものを垣間見る—ウィリアム・ブレイクの作品における「闇の肯定」から自作の省察へ—』の博士論文公聴会を行なった。はじめに、作品制作領域の論文であることを踏まえ、FALに展示されている作品が論文の一部であることを出席者に伝えた。その後、蔡云逸による論文の概要をパワーポイントの映像を交え約50分間の発表を行い、その後で作品について30分程度の質疑応答となった。公聴会終了後、審査委員会を審査会場(1号館217)に移し行った。公聴会の質疑応答に加え、審査員全員による申請者への質疑がなされ申請者の応答があった。終了後、申請者は退出し、審査員による可否判定が行なわれた。

公聴会の来場者から質疑応答が30分ほどあったのち、会場を移して本論文の審査を行った。

各審査委員から以下のような質問と講評があった。

・ 予備論文の段階からよく調べてさらに今回内容が深まっている点は十分評価できる。フロイトの夢の分析の理論についてどう解釈しているのかももう一度端的な言葉で聞きたい。フロイトだけでなく他の研究者の夢の理論について考えてみるのも今後の参考になるのではないかと思う。さらに色々な可能性が夢の中にはあるが、どうして夢を出発点とするのかシンプルな言葉で言えるだろうかといった質問や、今日の公聴会の発表が非常に分かりやすかったので別の機会にまとめてみてはとい

た提案や夢日記の記録方法としてサイアのタイプが版画の技法に似たような段取りがある点などをもっとダイレクトな説明があってもよかった。作品の色彩についても言及してほしかった。作品制作領域の制作者の文章として作品関係づけられとても良いという評価と作品制作領域の論文としては十分評価できるが、博士課程の研究論文としては、後少し歴史性や客観的な立場を反映することが望まれるなど意見をいただいた。

・その他、修正すべき点への細部について指示があった。

これらの質問と講評に申請者自身は適切に応答し、今後の研究を続けていきたいと約束した。

申請者の退出後、審査員による合否の判定を行なった。予備論文の修正点をしっかりと修正し厚みを増した論考は作品制作領域の中では素晴らしい成果と言えるだろうとの評価をいただいた。その結果、全員一致で博士課程本論文として合格となった。



レッドドラゴンの夢
2023年 ベニア板に油彩、テンペラ、蜜蝋 130.0cm × 180.0cm



Dream of red dragon 3
2023年 竹紙にサイアノタイプ、蠟 21.0cm × 29.7cm



Dream of two snakes and a man on bed
2020年 竹紙、サイアノタイプ、蠟 21.0cm × 29.7cm



Guess the meaning of the two snakes
2020年 紙、油絵の具 50.0cm × 60.0cm



Dream of hometown and 3 snakes
2020年 竹紙、サイアノタイプ、蠟 21.0cm × 29.7cm



The Castle inside out
2022年 キャンバス、油彩、テンペラとワックス、布、紙 250.0cm × 161.0cm



The Vision of Nowhere
2021年, パネル、油彩、テンペラ、ワックス 450.0cm × 250.0cm



The Vision of Nowhere (ディテール)



The Vision into home
2020年 キャンバス 油彩 116.0cm × 90.0cm



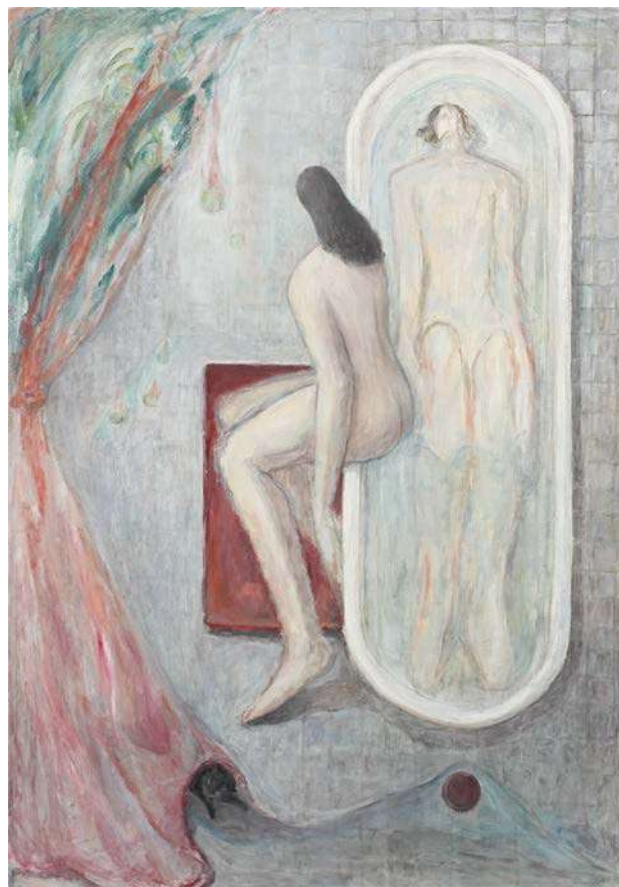
The Red Room
2020-2021年 キャンバス、油彩 80.0cm × 65.0cm



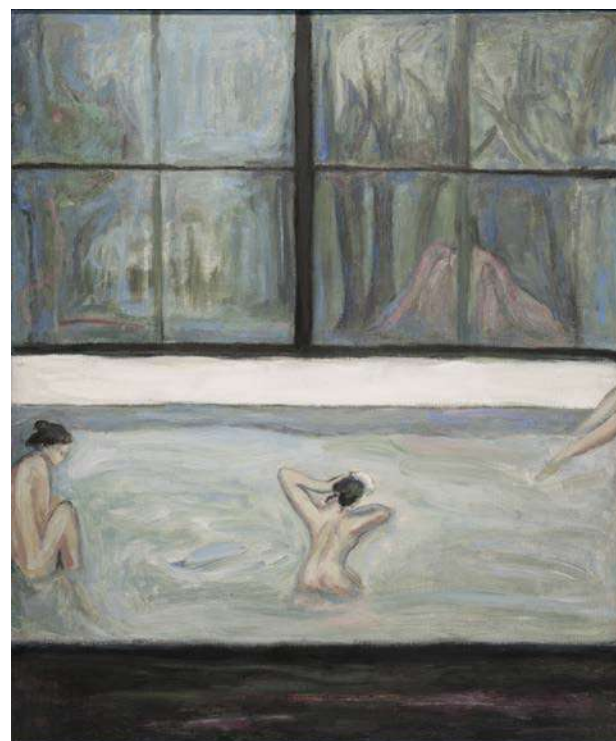
《A doubled teapot.》
2023年 キャンバス、油彩 160.0 × 112.0cm



I saw Her and a Man Holding a Blue bath towel
2022年 パネル、油彩、テンペラ、蜜蝋、ワックス 91cm × 120cm



The water support the fire, the water support the fire. No.1
2022年 キャンバス、油彩、テンペラ、蜜蝋 160cm × 120cm



蛇の湯 II
2023, キャンバス、油彩 72.7cm × 60.6cm